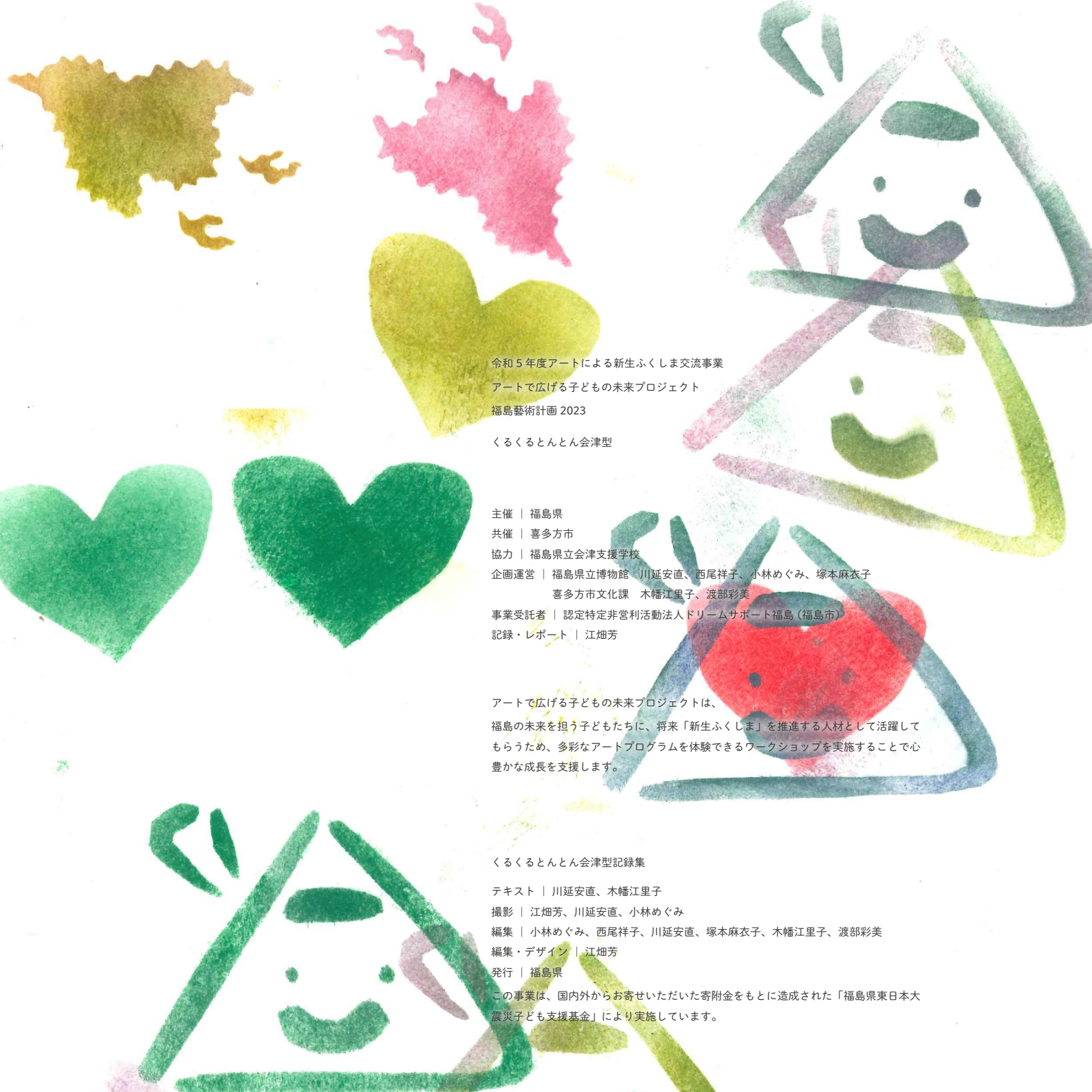


くるくる とん
とん

会津型

—
記録集



令和5年度アートによる新生ふくしま交流事業
アートで広げる子どもの未来プロジェクト
福島芸術計画 2023

くるくるとん会津型

主催 | 福島県

共催 | 喜多方市

協力 | 福島県立会津支援学校

企画運営 | 福島県立博物館 川延安直、西尾祥子、小林めぐみ、塚本麻衣子

喜多方市文化課 木幡江里子、渡部彩美

事業受託者 | 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島（福島市）

記録・レポート | 江畑芳

アートで広げる子どもの未来プロジェクトは、
福島の未来を担う子どもたちに、将来「新生ふくしま」を推進する人材として活躍して
もらうため、多彩なアートプログラムを体験できるワークショップを実施することで心
豊かな成長を支援します。

くるくるとん会津型記録集

テキスト | 川延安直、木幡江里子

撮影 | 江畑芳、川延安直、小林めぐみ

編集 | 小林めぐみ、西尾祥子、川延安直、塚本麻衣子、木幡江里子、渡部彩美

編集・デザイン | 江畑芳

発行 | 福島県

この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに造成された「福島県東日本大
震災子ども支援基金」により実施しています。

くるくる とん
とん 会津型

— 記録集



くるくるとんとん会津型 について

アートで広げる子どもの未来プロジェクト福島芸術計画 2023 では、今年度、福島県立会津支援学校のみなさんと二つのワークショップを行いました。一つは日本や世界の音に合わせて体を動かし身体で表現することを楽しんだワークショップ「感じるリズム 見つけるカラダ」。もう一つは喜多方で作られていた染型紙「会津型」の歴史や魅力を学び、陶芸・手工芸・和紙製品に活かして新たなものづくりにチャレンジしたワークショップ「くるくるとんとん会津型」です。

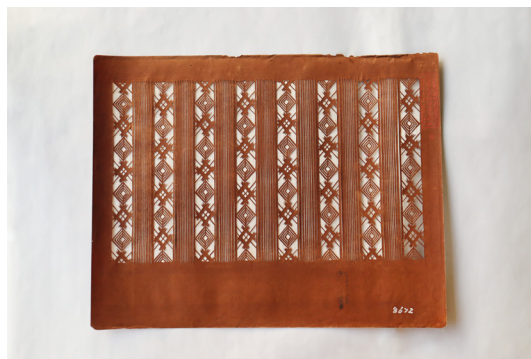
ワークショップ「くるくるとんとん会津型」には、会津支援学校卒業後の就労につながる作業を班ごとに学ぶ高等部の生徒のうち「陶芸班」「リサイクル班」「手工芸班」の36人が参加しました。

ワークショップを通して、伝統工芸をベースとした活動は、障がいの個性に応じた分業と作品の共同制作を可能にすることが実感できました。本記録集では、地域の文化資源である「会津型」に出会い、いきいきと創造と協働を楽しんだ生徒たちの様子をお伝えします。



会津型とは

喜多方の染型紙「会津型」とは、江戸後期から昭和初期にかけて、喜多方市内の小野寺家を通じて製造・販売されていた^{そめかた}染型紙（和紙を柿渋で貼り合わせた^{しぶがみ}渋紙に彫刻刀で柄を彫ったもの、主に布に柄を染めるために使われる道具）です。染型紙を使った染色方法を型染めと呼び、その過程では、柄のデザインを考える、染型紙を作る（渋紙作り・型彫り）、製品に柄を染めつけるといった多くの手間暇と技術が必要とされます。



8672 縞筋に緋筋



24893 波に千鳥

小野寺家は染型紙の販売網を東北一円に広がりますが、昭和10年代には型紙商としての歴史に幕を閉じます。小野寺家の蔵に残された染型紙や関係資料など約37,000点は市へ寄贈され、平成15（2003）年に福島県指定重要有形民俗文化財となりました。

染型紙は、かつて型紙商が行商に出て各地の染屋に販売するものでした。一軒の型紙商が残した資料としてこれほどの数のものは類を見ず、当時の東北の流通や経済活動を知る貴重な資料といえます。また、東北の生活に根ざしたデザインの特徴が見られ、まさに喜多方の歴史・文化を伝えるものです。

四季の花々やユーモラスな生き物たち、伝統的な柄からモダンでおしゃれな柄まで、多種多様な会津型は、日々の暮らしに寄り

添い私たちの心を楽しませてくれます。現在、会津型はデジタルデータ化されており、そのデザインを自由に活用していただけます。

陶芸班

12人

リサイクル班

12人

手工芸班

12人

6月29日(木)

先生方との打合せ

喜多方市文化課の木幡さんが会津型について説明したあと、先生方に型紙を使った色さしに挑戦してもらいWSのイメージを掴んでいただきました。



9月6日(水)

会津型って何だろう

喜多方市文化課の木幡さんから会津型の歴史や特徴を聞いたあと、型紙を使った色さしに取り組みました。普段の活動で作成した皿やカップに型で模様をつけました。

9月6日(水)

会津型って何だろう

喜多方市文化課の木幡さんから会津型の歴史や特徴を聞いたあと、型紙を使った色さしに取り組みました。普段の活動で作成したリサイクル和紙に型で模様をつけました。



9月7日(木)

会津型って何だろう

喜多方市文化課の木幡さんから会津型の歴史や特徴を聞いたあと、型紙を使った色さしに取り組みました。大きな無地の布や、平織りのテープに型で模様をつけました。

WS 2 回目

10月4日(水)

型彫りをしてみよう

伝統的な会津型の型彫りに挑戦しました。初めは慣れない道具に苦戦していましたが、次第に安定した手つきでナイフを扱い模様を彫り出しました。

10月19日(木)

カレンダーに
型染めをしよう

毎年パワー祭り(会津支援学校の文化祭)で販売しているカレンダー用のリサイクル和紙に型紙を使って色さしをしました。季節に合う模様の型を選び配置を工夫しました。

10月4日(水)

オリジナルデザインを
考えよう

福島県立博物館の小林さんから、型紙の染の仕組みやデザイン画制作のポイントを聞いたあと、オリジナルの型のデザインを考え、描いてみました。

きたかた会津型ウィーク

10月14日(土)
～10月29日(日)

作品展示

喜多方市内の展示会場では製品やWSの様子を伝える画像を展示し、陶芸班が会津型を使って製作したカップを「会津型カフェ」で使ってもらいました。

10月29日(日)

会津型ウィーク
クロージングトーク
に出演

クロージングトークで代表生徒がWSについて発表しました。

WS 3 回目

12月13日（水）

型彫り、色さしを してみよう①

型彫り担当の生徒たちは会津型の伝統的な模様の型彫りに挑戦しました。色さし担当の生徒たちは平皿に型紙をあわせ色合いや模様の配置を考えて色をさしました。

12月13日（水）

オリジナルデザインを 考えよう

色さしでのし袋、ポチ袋 をつくってみよう①

オリジナルデザイン担当のグループは思い思いに型紙のデザインを考えました。色さし担当のグループはめでたい模様の型紙を組み合わせて色を入れました。

12月14日（木）

オリジナルデザインの 型彫りをしてみよう

前回描いた、オリジナル型のデザインをもとに、型彫りに挑戦しました。

WS 4 回目

1月24日（水）

型彫り、色さしを してみよう②

型彫り担当の生徒たちは前回よりもさらに繊細な模様に挑戦しました。色さし担当の生徒たちはグラデーションをつけた色のさし方を教わりました。

1月25日（木）

色さしでのし袋、ポチ袋 をつくってみよう②

のし袋、ポチ袋製作のブラッシュアップに取り組みました。水引結びに挑戦し、高級感あふれるのし袋をつくる生徒もいました。

1月24日（水）

次年度に向けた試作品を つくってみよう

オリジナルデザインの型を使って色さしを行いました。1回目のWSで使用した大きな無地の布にオリジナル型の模様を追加しました。

2月6日（火）

先生方との打合せ
（オンライン）

今年度のWSについて先生と振り返りを行いました。各班の成果、次年度に向けた課題や展望について話し合いました。

くるくるとんとん会津型 成果展

2月20日（火）
～3月10日（日）

作品展示

WSで陶芸班、リサイクル班、手工芸班が作った作品を福島県立博物館で展示しました。

会津型ってなんだろう？

ここからは、支援学校の生徒さんたちの様子を作業工程ごとにわけてご紹介します。
年間を通して行ったWSのはじめに、「会津型」とは何か、染型紙を使って染めると
どのように布に柄がつくのか、スライドとともに紹介しました。

型染めは、日本の伝統的な衣装である着物を支える大切な技術です。まずはそれを知ってもらうために、着物が反物という1枚の布地からできていることから話を始めました。事前に先生から「画像を多めにすると伝わりやすいです」と教えていただいたので、成人式や卒業式で着物を着たときに撮った写真や、女性が反物を広げている浮世絵の画像を使い、着物そのものの形や歴史の深さを想像してもらいました。「着物を着たことがある人はいますか？」「何年くらい前から日本にあるでしょう？」と問いかけると、うーん...と考える生徒さんたち。「問いかけは三択問題にすると答えやすいかも」と先生よりアドバイスをいただいて取り入れてみると、選択肢のどれかに挙手をしてくれて、生徒さんの考えや理解度がより見えやすくなりました。

た。

続けて、布地に柄をつける伝統的な方法を二つ紹介しました。生地になる前の糸の段階で染色してから織物などの生地仕立てる「先染め」と、織られた生地や製品を染める「後染め」です。手工芸班では「さをり織り」で作品を制作していることもあり、織物の仕組

布に柄をつける方法は？

その2 染めもの 「型染め」



ぼうせんのり
防染糊という
特別な糊をぬります



座学で使用したスライド。見てわかる資料づくりを目指しました。

みは理解してもらいやすかったようです。

型染めの工程では、まず「一反もめん」のような白くて細長い布地に型紙を置き、味噌のような色で少し粘り気のある「糊^{のり}」を型紙の上から塗っていきます。これは「糊置き」といい、柄になる部分を防染（染まらないようにコーティングする）します。連続する柄の場合はつなぎ目が分らないように糊を置く必要があります、高い技術が必要です。

布地に糊が定着したら、ようやく染めの工程に入ります。藍などの染料に布を浸したら天日にあてて風を通す、この作業を数回繰り返さなければきれいな色には染まりません。染め終わった布を水で洗って糊を落とすと、柄の部分が白く残って完成です。

そんな型染めに使われる道具である染型紙が喜多方の小野寺家から東北一円に売られていたこと、産業としては終わりを迎えたもののそれらの資料が文化財として保存・活用されていることをお話ししました。

先生たちのサポートで、話したり、見せたり、一緒にやってみたり。生徒さんたちに伝わる方法を工夫するなかで、少しずつ深まる生徒さんたちとのコミュニケーションに喜びと期待が膨らみました。



図案づくり 1

1 回目の WS で会津型体験をした生徒さんたちの様子を見ていた先生たちから、製品作りに向けてオリジナルの型紙をつくってみたいとご相談をいただきました。型紙の図案はデザイナーが担当し、それを彫師が型紙にします。生徒さんたちには会津支援学校らしいデザインを考えてもらいました。





先生たちからの「オリジナルの型紙をつくってみたい」という嬉しいご相談を形にすべく、手工芸班のみなさんと陶芸班から越境参加してくれたデザイナー希望の3人で型紙の図案を考える時間を設けました。

とは言っても好きに描いた絵をそのまま型紙にできるわけではありません。まずは型紙の仕組みのおさらいです。福島県立博物館の工芸担当の小林さんから型紙のポイントを伝えました。この事業では初心者も手軽に取り組めるように、染めではなく型紙の上から色を入れる「色さし」の道具として型紙を使うことにしていました。そこで、切り抜いた箇所につくことと、紙

を切り抜いて模様を表現するためのデザインが必要であることをお話ししました。続けて福島県立博物館の民俗担当の西尾さんが、博物館から持参した赤べこや起き上がり小法師などの会津らしい郷土玩具などを見てもらいながらその由来などを説明。「会津支援学校らしさとはなんだろう？」を考えつつ、それぞれに図案（デザイン）の製作に入りました。描かれた個性豊かな図案たちは、喜多方市文化課のみなさんの手でさらに型紙図案としてブラッシュアップされて、オリジナルの型紙づくりは次のステップへと進みます。

図案づくり 2

デザインを型紙に起こすのは職人のなせる技です。

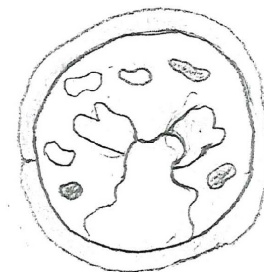
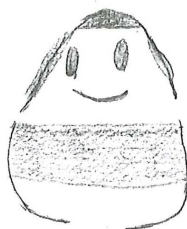
染めの作業を想像しながら、線の長さや幅を考え、必要な箇所には補強を入れます。

また、隣の柄ときれいにつながって見えることも大切です。

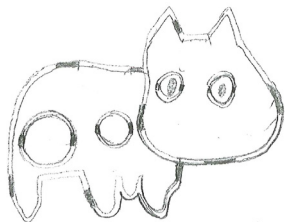
手工芸班の生徒さんたちのデザインをもとに、オリジナル柄の型紙に仕上げました。デザインの雰囲気は残しつつ、型として使えるように、線を切り離したり、かたちを調整したりと編集を加えます。特に赤べこや起き上がり小法師などは、それぞれの表情がユニークでとてもかわいらしく、これをぜひ活かしたいと、顔だけのパーツを作ることになりました。顔のない赤べこや起き上がり小法師、学校のマスコットキャラク

ターであるパワーくんのシルエットパーツも作り、組み合わせることでいろいろな表情が生み出せます。

地球のようなまるいかたち、やさしくほほえむ起き上がり小法師、びっくりしたような赤べこ、「ぴえん」なパワーくんなど、会津支援学校ならではの型紙図案ができました。「喜多方の染型紙『会津型』」という歴史文化をもとにした新しい“会津型”のはじまりです。



生徒さんが描いてくれたデザイン。染型紙の仕組みを聞いて、柄が抜け落ちないようにするためにつなぐ位置を考えてくれました。



生徒さんのデザインをもとに図案にしました。どうしたら強度が十分になるか、生徒さんたちが彫りやすいか。少ないながらもありったけの経験を活かして考えました。

生徒さんが彫ってくれて型紙になった赤べこ。同じ図案でも、彫る人によって型紙に個性が出ます。



型を彫る

先生と相談して、手先の器用な生徒さんたちに挑戦してもらいました。

喜多方の小野寺家では、残された型紙と道具などから、渋紙を何枚も重ねて一度に彫って量産するための「突彫り」を中心に、刃先を花びらなどの様々な形にした彫刻刀を使う「道具彫り」などの技法が使われていたと考えられます。

型を彫る作業では、刃先が30°に尖ったデザインナイフと専用のビニール下敷きを使います。型を彫るときのポイントは大きく二つ。一つは、彫りはじめは刃を直角に立て、線を彫るときは刃をたおして自分の手前に引く、最後にまた刃を直角に立てるということ。もう一つは、紙は穴が開くほど強度が弱くなるので、小さいパーツから彫っていくときれいに仕上がるということ。これらを実演しながら説明しました。一つのパーツが彫れると、生徒さんが「わー！すごい」と拍手をしてくれました。

型彫りは、陶芸班・手工芸班の生徒さんが体験してくれました。陶芸班には、細かい作業を得意とする職人氣質の生徒さんが3名います。今回は、喜多方市文化課セレ

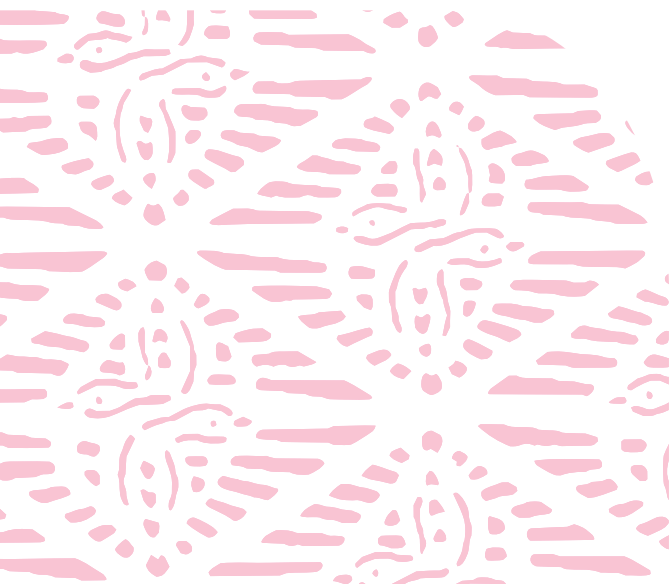
クトの陶器に合う会津型の中から、彫ってみたい柄を選んでもらい作業に入りました。3名ともすぐにコツを掴んで、黙々と集中して取り組んでくれました。静けさの中に型を彫る音が響きます。彫り方がわかってくると、難易度の高い柄に積極的にチャレンジしていきます。難しい柄を彫るときに必要な曲線の彫り方もすぐに習得してくれました。ゆるかわいい向い鶴、踊っているようなわらび、モダンな龍など、生徒さんたちが彫った会津型が陶芸製品にどう生きてくるのか、とても楽しみです。

手工芸班では、まず前回のスケッチをもとに型に仕上げた図案をお披露目しました。「いろんな顔がいてすごくかわいい」「『ぴえん』は私が描きました」と嬉しそう

に話してくれる生徒さんたち。彫ってみたい柄を選んで作業に入ると、みんな器用に細かいパーツを彫り進めはじめました。その様子を見て、先生たちもやってみたいと参加してくれましたが、いざやってみると、先生たちは「細かくて大変!」と苦戦しました。彫りの作業は、手先の器用さ、集中力と根気が必要です。楽しそうに取り組む生徒さんたちの姿から、自分の得意なことに出会ったときの自信と意欲の大切さを改めて教えてもらいました。



生徒さんが彫ってくれた図案の一つ。
こんなに細かくて密集した柄も完成させてくれました。



色さし

染型紙は主に布に柄を染めつけるために使われました。型紙商とは別に、染め物を専門とする職業がありました。他にも陶器や、皮に漆で模様をつける印伝^{いんでん}という技法にも型紙が使われることがあります、その場合、今回のように、型紙の上から色のつく材料を刷り込みます。

本事業では防染による柄の染め出しではなく、より手軽にできる色さしを行いました。1 回目の WS。まずはお手本を見てもらいます。使う道具は、型紙、刷り込み刷毛、スタンプインクの三つ。布の上に型紙を置き、刷毛にインクをとって型紙の上からくるくる、とんとんと刷り込んでいきます。型紙をはずしてみると、柄が浮かび上がります。

いよいよ生徒のみなさんがやってみる番です。生き物、植物、幾何学などたくさん用意した型紙の中から、各自染めてみたい柄を選んでもらいます。あまり迷うことなく型紙を選び取って、布や和紙、陶器に柄を染めていきます。それまで静かだった教室は賑やかになり、「くるくるとんとん」のリズムが響き渡ります。ビビットな蛙、

やさしい色合いの菊の花、飛び交うたくさんの蝶々…。浮かび上がる柄たちに、生徒さんの表情がぱっと明るくなりました。「これ見て！できた！」と指さして教えてくれる子、「楽しいね！いえーい！」と盛り上げてくれる子、黙々と作業する子、会津型を通してみんなの個性が見えてきました。

なかには色さしに苦勞する生徒さんもありました。型紙の角や細い部分に刷毛を使って色を入れるのはなかなか難しく、刷毛で何度も型紙を力いっぱい叩いたり擦ったりしながら頑張って柄をつけています。でも、力いっぱい叩いても色は入れられず、刷毛が傷んでしまいます。「どうやったら上手に柄ができるかな」優しく刷毛をくるくる動かしたり、さっと擦るように擦り付けたり、一人一人が工夫をして自分のやり方を



見つけていきます。きれいに柄をつけるにはどうしたらいいか、考えながら何回も挑戦します。向上心を持って取り組む姿を見守りながら胸が熱くなりました。

「今日は色さしだから、みんな楽しみでそわそわしているんですよ。」

2回目の WS の前に、先生が私たちを教室に案内し

ながらニコニコして話してくれました。はじめは、色さしの作業が単調すぎないか、文字通り型にはまる作業になってしまわないかと心配もありましたが、この言葉にはっとしました。生徒さんたちにとって、自分の手を動かしてものができあがっていく喜びがとても大切であることがわかりました。

会津型の製品づくり

生徒さんたちが色さしに慣れてきたころ、これからどんな製品を作っていくか考えるために、各班それぞれに試作を行いました。これまでに見えてきた生徒さんたちの得意なことを組み合わせるために、試作をしてもらいながら考えます。

陶芸班は、自分たちで製作した素焼きのカップやお皿に会津型の伝統的な柄をつけていきます。柄のつけ方を工夫するために、グラデーションの方法も学びました。色とりどりの陶芸用の絵の具を交換し合いながら色さしをするうち、最初は自分の好きな色で染めていた生徒さんたちが、最後のワークショップでは自分が選んだ型紙の柄に合わせてどんな色にしたらいいか考えて絵具を選んでくれる姿も見られるようになりました。

リサイクル班は、はじめは自分たちで牛乳パックから作った和紙に色さしをしてカレンダーを作る計画でしたが、新製品として、のし袋とポチ袋を作ることになりました。色さしをするチームと水引を作るチームに分かれての作業です。色さし班では型

紙からインクがはみ出て袋を汚してしまわないように、先生たちがクリアホルダーを切ってカバーを作ってくださいました。作業も捗り、みんなすごい速さで柄をつけていくので、準備しておいたのし袋用の紙が足りなくなるほどでした。水引チームが作った水引と組み合わせると、独創的なのし袋ができあがりました。

手工芸班は、ポーチやバッグなどの製品とそのタグを作るための大きな布のチームと、アームカバーとエコバッグのチームに分かれて作業しました。大きな布チームは、生徒さんたちが図案を考えた赤べこや学校のマスコットキャラクターであるパワーくん、起き上がり小法師などの型紙を使い、さまざまな色や型紙の裏表を使って自由に布を染めていきます。アームカバーチーム



は、製品をどんなふうに使ってもらいたいかを先生と話し合いながらデザインを考えました。試作をしはじめると、「ここに桜の花を付け足したい」と言って、鉛筆で桜の花をスケッチして、隣で作業をしていた型彫りチームの生徒さんにオーダーしました。すぐに桜の型紙ができあがり、アームカバーに桜の柄が入りました。彫師と染師

の分業体制を思わせる一場面に、大人たちも「おお〜」と感心していました。

会津型を手がかりに、さまざまな工程で生徒さんたちそれぞれの個性を活かし、補い合って製品を作り上げていきます。生徒さんたちの笑顔の向こうに、みんなで作った製品を手にとった人の笑顔が見えるような素敵な時間になりました。



ワークショップをすすめるなかで、この取り組みをご紹介する機会がありました。
生徒さん自身が発表してくれるなど、活動を多くの方々に知っていただくことができました。

きたかた会津型ウィーク

展覧会「柄をたのしむ、柄とくらす」

会期：2023年10月14日（土）～10月29日（日）

会場：旧大森家

クロージングトーク「伝統や文化のり・デザインを考えてみよう」

会期：2023年10月29日（日）

会場：あづま別棟

会津型は、福島県指定文化財であるとともに、誰でも自由にデザインを活用できるオープンソースでもあります。喜多方市では「みんなの会津型プロジェクト」と題し、会津型デザインの活用をテーマとしたさまざまな取り組みを行っています。10月14日～29日には、喜多方市内を巡りながら会津型の魅力に触れられる市民参加型事業「きたかた会津型ウィーク」を開催しました。小田付重要伝統的建造物群保存地区を会場に、歴史を感じる町並みのなかで、展覧会やワークショップ、トークベン

トなどを通じて会津型を楽しんでいただくことができました。

きたかた会津型ウィークでは、会津支援学校のみなさんとのワークショップで生まれた作品を展覧会場などに展示し、クロージングトークの場で生徒さんに体験した感想や成果を発表していただきました。喜多方市内の高校生や、他県の大学生、ゲストの大人たち、そして観客の方々を前にして堂々と発表する生徒さんの姿はとても頼もしく、きらきらと輝いて見えました。



9月から翌年1月にかけておこなった4回のワークショップで、それぞれの班ならではの作品がたくさん生まれました。
2月から3月にかけて福島県立博物館でその成果を多くの方に見ていただく成果展を開催しました。

くるくるとん会津型+感じるリズム 見つけるカラダ 成果展 +会津支援学校と福島県博の2023年度

会期：2024年2月20日（火）～3月10日（日）

会場：福島県立博物館 雪国ものづくり広場 なんだべや

福島県立会津支援学校と行った二つのワークショップ「くるくるとん会津型」と「感じるリズム 見つけるカラダ」の成果を、作品とワークショップの様子を伝える映像作品でご紹介しました。

会期中には、福島県立博物館が行っている文化観光事業「三の丸からプロジェクト」の一環で、パソコンで操作できるテレプレゼンスロボットを使った遠隔観覧を行い、会津型ワークショップに参加した高等部の皆さんが、学校にしながらに県立博物館での成果展を観覧してくれました。また、ご家族といっしょに会場を訪れ、作品を前に楽しそうに会話する姿も見せてくれました。



高等部会津型 WS 全体について

会津支援学校高等部地域連携担当 菅野 瞳

高等部では、職業B（作業）において、陶芸班、手工芸班、リサイクル班が、喜多方市の染型紙「会津型」の歴史を知り、染型紙「会津型」を使つての型染め、伝統的なデザインを彫る型彫り、オリジナル型のデザインを考える活動などのワークショップに取り組みました。生徒たちの真剣に取り組む表情や、できあがったデザインを見せてうれしそうにする様子などから、体験活動の大切さを改めて感じることができました。また、自分たちで作っている製品にデザインを取り入れるため、色さしする位置や色合いを考えたり、グラデーションの方法を教えていただいたり、製品の質を向上させるための技術を丁寧に教えていただきました。生徒たちの活動の幅が広がり、一人一人が自分の仕事に責任をもって取り組もうとする姿が多く見られるようになりました。

生産活動等とおして、働くために求められる力をさらに育てていけるよう今後も学習を行っていききたいと思います。

ワークショップに携わっていただいた博物館の皆様、喜多方市の皆様、本当にありがとうございました。

陶芸班の会津型 WS の感想

会津支援学校高等部陶芸班担当 菅野 友代

陶芸班では、陶器の焼き物への会津型の型染めについてご指導いただきました。私自身、今回の連携によって会津型を初めて知ったのですが、日本の伝統的な模様以外にも海外の影響を受けたものもあり、作られた時代背景なども含め、とても面白いデザインだと感じました。生徒達にとっても、自分たちの住んでいる会津の伝統工芸を知る良い機会になったと思います。

また、それぞれの実態に合わせて、型選び、型彫り、色さしといった作業に取り組めたことも良かったです。来年度からは、今年度に教えていただいた技術を生かして、さらにレベルの高い製品作りに挑戦していきたいです。この度は本当にありがとうございました。



手工芸班の会津型 WS の感想

会津支援学校高等部手工芸班担当 穴澤 麗子

手工芸班では、ワークショップに4回参加させていただきました。1回目の会津型の歴史や特徴についてのお話は、初めて聞く生徒も多く、興味津々の様子でした。色さし体験では、渋紙の匂いをかいだり、好きな絵の具を選んだりして、思い思いに楽しんでいました。2回目のワークショップでは、本校オリジナルの型紙をデザインし、3回目の型彫り体験につなげることができました。4回目は、会津型を生かした製品作りに挑戦しました。回を重ねるにつれ、生徒が自分で考えて、博物館の方に質問する姿や、楽しさを言葉や表情で積極的に伝える姿が見られてきたことが、大きな成果だと感じています。

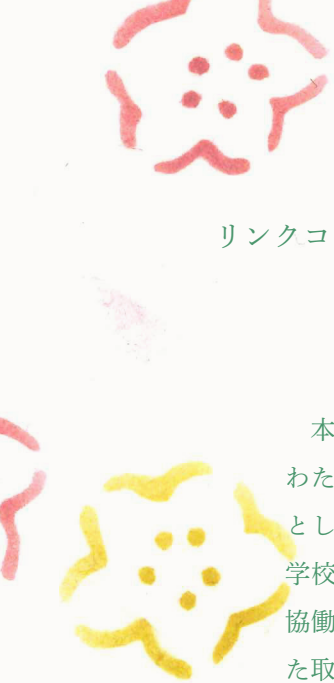
今後の製品化に向けて、皆で意見を出し合いながら準備を進めていきたいと思います。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。今後もしようしくお願いいたします。

リサイクル班の会津型 WS の感想

会津支援学校高等部リサイクル班担当 鹿島 由夏子

リサイクル班では、牛乳パックを再利用して紙を漉き、漉いた紙をカレンダーやポチ袋などの製品にしています。工程ごとに担当の生徒がありますが、これまでの活動では、製品の完成を直接感じるのが難しい生徒も多くいました。今回、会津型のワークショップを通して、同じ一つの型を使うことで、生徒の実態にかかわらず同じ仕上がりの製品ができあがることを感じました。全4回のワークショップを通して、生徒一人一人が目の前で製品が完成していく喜びを感じていると実感できました。「次の作業は博物館のワークショップです!」と伝えると、目をキラキラさせて、はけをとんとんとする動きや「とんとんするの?」と言葉で表現する生徒が多くいました。本当に楽しみだったのだと思います。作業に彩りと広がりや、そして、すべての生徒が製品に深くかかわるきっかけを作ってくださったことに感謝の気持ちであふれています。ありがとうございました。





リンクコーディネーターとしての県立博物館

福島県立会津支援学校長 加藤 香洋

本校は、障がいのある子どもたちが生涯にわたって自らの可能性を追求し、地域の一員として豊かな人生を送ることができるよう、学校経営・運営ビジョンに「地域との連携・協働」を掲げ、多様な学習活動の充実に向けた取組を推進しています。

県立博物館とは年間を通じて連携・協働して授業づくりを行っています。なかでも今年度実施した「福島芸術計画」は次のような点で大きな意味をもっています。

まずひとつは、地域の伝統や文化に触れることで、子どもたちは地域が大切に守ってきた価値に気づき、継承者としての自分の役割を知ったことです。喜多方市教育委員会とつながり、伝統的な「会津型」のワークショップを実施していただきました。「会津型」を学ぶことで、子どもたちは地域の歴史に向き合い、活力ある社会づくりに貢献した先人のスピリッツを感じることができました。

次に多様性を尊重し互いの価値観を共有する機会を得たことです。音楽とともに体で自由に表現するダンスのワークショップをとおして、子どもたちは他者と共感したり、言葉

を越えて理解する自由な翼を手に入れることができました。感動を分かち合うことの喜びに満ちた子どもたちの笑顔は、未来を生きる世代がこの場で育ちつつあることを実感させてくれるものでした。

すべてのワークショップは、子どもたちの抱える課題や困難を「弱み」として捉えそこに着目して支えるという視点ではなく、子どもたちが持っている「長所・強み」に着目し、可能性を引き出していくエンパワメントの視点でおこなわれており、子どもたち一人一人が学びの主人公でした。

近年、「多様性」「包摂性」に「公平、公正」を加えた DE&I (Diversity, Equity and Inclusion) の考え方が重視されています。ワークショップは、教育的ニーズに合わせて公平、公正に教育資源を配分するという理念を正に体现するものでした。

学校に「あるもの」と「ないもの」を組み合わせ、新たな価値を生み出す一。本校にとって県立博物館は、専門性を持つ人々とつなぎ、空間と時間を共有しながら新たな学習コンテンツへと導くリンクコーディネーター、紐帯のような存在です。県立博物館をとおして、子どもたちはふくしまを発見し、多くの人やもの、文化に出会いふれあうことができました。これからも本校ならではの学びの創造に伴走し、障がいのある子どもたちの学びの可能性を広げてくれることを期待しています。

子どもたちの無限の好奇心と可能性

福島県立博物館長 川名 義則

福島県立博物館では、より地域や県民の方々に広く愛される施設となるため、「誰もが利用できる博物館」、「みなさんをつくる博物館」を目指し、様々な団体と連携しながら事業を展開しています。

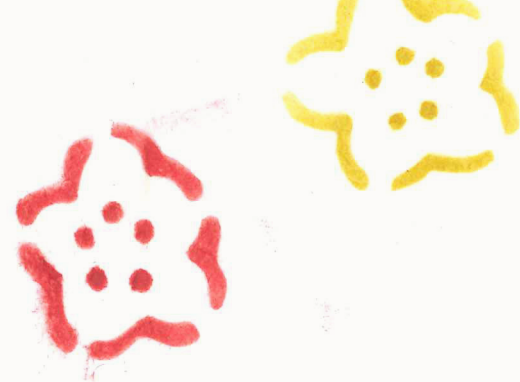
御紹介するのは、多彩なアートプログラムの実施により子どもたちの豊かな成長を支援する事業である「アートで広げる子どもの未来プロジェクト福島芸術計画2023」において、令和5年度に、当館と会津支援学校が連携して「会津型」に取り組んだ成果です。

高等部の手工芸班、陶芸班、リサイクル班の生徒たちが、地元地域の歴史・文化のひとつである「会津型」を学び、新たなものづくりの可能性を生み出すワークショップでさまざまな作品を制作しました。どれも個性が光り、ユニークで芸術的な作品ばかりです！生徒たちはワークショップを重ねるごとにできることが増え、好奇心を持って様々な染め方やオリジナル型の制作に挑戦するなど、成長

していく姿が見られました。来年度に向けて、会津型を用いた製品づくりに挑戦する予定であり、生徒たちはますます意欲がわくことでしょう。どのような製品が誕生するのかとても楽しみです。

当館では令和3年度から会津支援学校と連携して各種プログラムを展開しています。どのようにしたら生徒たちのよさや好奇心、可能性を引き出すことができるか、日頃からきめ細かに協議しながらプログラムを組み立てており、今後この取組をさらに「シンカ」させていきたいものです。

当館には、各分野の貴重な本物の資料、専門知識がある学芸員、そして、様々なアイデアがあり、より多くの方に当館を活用していただきたいと考えています。この記録集を大勢の皆さんがご覧になり、関心を持っていただき、福島県の子どもたちの無限の好奇心と可能性を引き出すため、この取組の輪が他の学校にも広がっていくことを願っています。



あらたな連携の第一歩

会津型 × 支援学校

喜多方市教育委員会 文化課 木幡 江里子

初めて会津支援学校へお伺いしたのは初夏の時期。明るく生徒思いの先生方が私たちを迎えてくださいました。その日は先生方を対象に、会津型の歴史や特徴についてのレクチャーと、型を使ってエコバッグに色さしするワークショップをさせていただきました。体験を通してデザインの豊かさや色さしの楽しさをお伝えしたく、伝統的なモチーフやかわいい生き物、モダンな幾何学柄など様々な会津型を用意し、自由に染め付けてもらいます。手を動かしながら自然に会話が広がって、「会津型を知らなかった」「こんなにすてきな柄があるんですね」「この作業なら〇〇さんもできそう」「ものづくりにぜひ取り入れたい」などの声をいただき、会津型の汎用性の高さとその活用可能性を感じていただく貴重な機会になりました。

生徒さん向けのワークショップに入ると、会津型を使ってみんながいきいきと作業するいくつもの場面に立ち会うことができました。図案を考える・型紙を彫る・色さしをするなど、型染めの各工程を分割し、生徒さん一人一人の個性に合わせて活動の場を創出できたことが会津型活用の大きな成果になったと感じています。そして博物館や支援学校のみなさまとともに、会津型を取り入れてより良いものづくりにつなげていくには…と試

行錯誤しながら、協働で事業を進められたことが何よりありがたかったです。完成した作品を見ると、どれも手仕事の温かみが伝わるすてきな仕上がり。子どもたちの個性を感じながらも、型で縁取られることによって統一感が生まれていました。

喜多方市では、会津型のデザインを活用して他分野（教育・観光・商工・福祉など）と連携を図ることで、身近に文化財を楽しむまちを実現し、文化芸術の持つ創造性を地域振興にいかす取り組みを進めています。「くるくるとんとん会津型」はその連携の第一歩として、私たちに多くの成果や気づきを与えてくれました。このたびお世話になったすべての方々に深く感謝申し上げます。

かつて産業として人々の暮らしに「柄」を届けた会津型。本事業を通して様々な人やものと出会い、また新たな価値が生まれようとしています。次なるステップは、すてきな製品の数々を多くのみなさまへお届けすること。子どもたちの活動を広く知っていただくとともに、「会津型」がさらに身近で愛される存在になったら、どんなに喜ばしいことでしょう。そんな未来を想像すると、いまからわくわくが止まりません。

伝統工芸と支援学校の出会い くるくるとん会津型

福島県立博物館 川延 安直

会津支援学校との連携事業も回を重ね担当の一人である自分も校内で迷わなくなってきました。そんな令和5年度のプログラムが「くるくるとん会津型」。「くるくるとん」は、会津型の上から布地に色を染めていく時に叩いたり回したりする刷毛の扱いからきていますが、子どもたちのノリノリの感じも伝わってくるまさにノリの良い事業名です。

一口にノリが良いと言っても、子どもたちのノリは千差万別。イエ〜イ！とクラスの雰囲気을上げてくれる子、ひたすら黙々と型紙切りに集中する子、新しい柄をじっくり考える子。そんなさまざまなノリが響き合い、その響きを共有できた「くるくるとん会津型」でした。

さまざまな特性、関心を持った子どもたちが、自分に合った好きな工程、作業を見出して分担し、最後に熨斗袋やカップなどの製品に結実していく。個人の表現行為が個人で終わることなく、他者を引き継ぎ、他者に引き継がれる。クラス、特性を超えて製品を作り上げる一貫したプログラムは今回が初めての試みでした。

また、地域の伝統工芸に取り組んだのも初めての試みでした。筆者も協力している喜多方市文化課では福島県指定文化財の会津型を保存活用する事業を進めています。伝統工芸は多様な職人技の集積です。会津型もまた同様です。職人技の集積とはさまざまな技能を持つ職人の協働ということでもあり、支援学校の子どもたちが協働を体験するテーマとして会津型は最適だと考えました。喜多方市文化課様のご理解、ご協力をいただき、

一時の体験ではなく、本格的な会津型作品の製作に取り組むことができました。

個性の自由な発露はアートの重要な機能です。が、一つのことにみなさんがそれぞれの持ち味を発揮して共に取り組む。そして、成果を分かち合う。このコミュニケーションもまたアートの大切な機能なのです。

豊かな想像力で不思議な地球柄の模様を考えてくれた子
すごい集中力で細かい型の模様を正確に切り抜いていく子
女子に型抜きを頼まれ、え〜と照れながら一生懸命に仕上げてくれた子
教室を訪ねた私たちをいつも元気な声で迎えてくれた子
みなさんの顔が思い浮かびます。

福島県立博物館ではみなさんの力作を展示しました。ずらっと展示されたカップやお皿、熨斗袋やポチ袋は伝統に裏付けされた安定感があって、どれもすてきな仕上がりでした。親しい友や遠い親戚、好きな人に贈りたくなる。そんな幸せをまとったものばかりでした。

さあ次なるステップです。

このすてきなものをより多くの方々にお渡ししたい。子どもたちの感性と努力を知ってほしい。そのためのプログラムに向けて動き始めます。

